

第3分科会記録

テーマ：ことばの教室がインクルーシブ教育システム構築に果たす役割
—言語障害教育の専門性を生かす取組—

話題提供者

研究報告1 牧野 泰美 (国立特別支援教育総合研究所)
実践報告1 三坂 烈慎 氏 (北海道札幌市立青葉小学校)
実践報告2 高橋 順治 氏 (奈良県生駒市立生駒小学校)
研究報告2 小林 倫代 (国立特別支援教育総合研究所)
話題提供 庄司 美千代氏 (文部科学省初等中等教育局特別支援教育課)

司会

久保山 茂樹 (国立特別支援教育総合研究所)

はじめに、司会の久保山より、本分科会の趣旨、日程等について説明を行った後、上記話題提供者5名より研究報告、実践報告、話題提供があった。

牧野は、研究の趣旨を説明した後、調査から、研修会の持ち方の工夫や専門性の継承に関する取組が明らかになったこと、ことばの教室が設置されている地域の状況によって果たしている役割の違いが明らかになったこと等を報告した。その後、三坂氏は、北海道におけることばの教室の専門性維持向上の取組について、高橋氏は、生駒市におけることばの教室の地域連携と支援の取組について、それぞれ実践報告を行った。小林は、ことばの教室の活動は、校内や地域の状況との関連の中で生じた活動であり、そこで必要となる知識や情報等も、ことばの教室の求められる専門性と捉える必要があること、インクルーシブ教育システム構築に向け、ことばの教室の専門性と地域との関係の中での活動について等研究の報告をした。庄司氏からは、言語障害教育の専門性が、学習の基盤となる言語能力の育成、各教科等における指導の充実、社会に開かれた教育課程の実現といった子どもの学びの充実に繋がるものであるといった話題提供があった。

(以上、プレゼンテーション資料P71－P93参照)

<参加者との質疑応答>

質問者：学童保育との連携が大切と考えている。生駒市の報告にあった取組の経緯を知りたい。

高橋氏：学童保育からのニーズを把握した市教育委員会から働きかけがあり、学童保育担当者対象に研修会、見学会を実施した。

質問者：研修会の講師をどのように育てているのか。

三坂氏：講師が固定化してきてしまいがちなので、チームで後継者を育てていくような取組をしている。

<全体協議>

- 司会者：専門性の維持・向上について、各各地域等での取組を紹介いただきたい。
- 参加者：岡山県では、ことばの教室の経験年数の違いによって、研究協議会の中で、アドバイザー、講師、実践報告というように役割を決め、専門性の向上に努めている。
- 参加者：島根県では、ことばの教室、言語障害教育に関するだけでなく、年 1 回、全障害種に関わる研修会を行っている。研修会に参加すると、おもしろいと思う人を育てることが大切だと思っている。
- 司会者：言語障害教育、ことばの教室の専門性を学校や地域にどう生かしていくのかといった点について意見を伺いたい。
- 参加者：地域の資源である福祉や医療機関等との連携をしていくことが大切だと考えている。ことばの教室では、連携先をコーディネートすることも専門性ではないかと思っている。
- 司会者：ことばの教室は、多様な学びの場の一つとして、個々の教育的ニーズに対応し、医療・福祉等の各種関係機関と連携してきたわけだが、今後、インクルーシブ教育システム構築にどんな役割を果たすかといった点について考えを伺いたい。
- 三坂氏：連携がキーワードになるのではないかと考えている。行政も巻き込み、専門性を生かしながら、対等な関係で連携していくことが大切であると思っている。
- 高橋氏：それぞれの機関の強みを生かしながら、弱い箇所は他と繋がって補い合っていくことが必要なのではないかと思う。
- 庄司氏：教員同士でも、その経験や立場等によってイメージする「専門性」の内容はまちまちである。本研究を通して専門性を捉える観点が整理されたと思う。多様な学びの場や地域の実情等に応じてその観点から必要な研修の在り方を考えていくとよいのではないか。

<まとめ>

言語障害教育の専門性がベースにあって、ことばの教室（通級指導教室等）の実践や活動がある。今後は、地域において、どのような資源があるのかを把握し、地域の資源とことばの教室の専門性の関係性を実践的に検討していかなければいけないと考えている。